

「見えぬけれどもあるんだよ」

昨年10月～11月に、NPOブルーアースと地盤品質判定士会神奈川支部の共同主催で、「地球環境変化と地盤防災・減災を横浜から考える」のテーマで、対面とオンラインの“ハイブリッド形式”の5回に亘るセミナーが開催されました。冒頭の基調講演を当社団の安原一哉代表理事にお願いしました。私も担当幹事として運営・講義に参加できました。

地盤品質判定士の方々による講義も、ハザードマップの見方や宅地の災害危険度評価など身近で興味深いものでしたが、最も印象に残ったのは講義に先立って行われた崖地の野外巡検でした。現地は我が国で初めて「行政代執行」が行われた斜面でした。私が住む横浜市の斜面災害リスクが高いことは、講義で教えられていましたが、斜面の迫力は強烈でした。併せて、巡検途中の公園から遠望した下末吉台地のでき方や形成年代の説明に興味をそられました。未だ地殻変動が進行していることに、初めて気付かされました。

工学の視点で地盤を学び、実務に従事して来ましたが、地盤を理解する上では理学の地質学の知識が必須であることに、思い当たりました。

数年前、地盤工学を学ぶ導入として、東京スカイツリーの地中の基礎形状や、海上石油掘削リグのピア・櫓の高さ（東京スカイツリーがすっぽり入る深さに立っている）を題材に「大切なものは目に見えない」ことを講義して、学生と共に学んで来ました。ガイダンス授業の趣旨は、目に見えないインフラストラクチャーが私たちの生活を支えている、その建設やメンテナンスに卒業後に携わることに学生が誇りを持ってもらうことでした。

授業では、湯川秀樹の随筆「目に見えないもの」を推薦して読書を勧め、サン・テクジュペリの「星の王子さま」から「肝心なことは、目に見えない」を紹介して、関心を高めてもらうことを狙いました。目に見えない程小さい原子・素粒子の世界から、遠すぎて見えない深宇宙のことまでが、私たちの生活と結び付いていることを実感できれば、人生の意味を新たに見いだせると思います。

上記の巡検以降、歴史に興味湧き、地質年表や「137億年の物語－宇宙が始まってから今日までの歴史－」（文藝春秋社）などを読みながら、過去から未来に向けての時間軸が目に見えない最重要項目であり、かつ、大切な視座を与えてくれると考えています。

詩人金子みすゞに「風とたんぼぼ」という詩があり、“昼のお星はめにみえぬ。見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ。”の一節が浮かんで来ます。地域・国土・地球の空間的な広がりに加えて、当社団の活動では時間の連続性にも気を配りたいものです。

岸田 隆夫（2012年3月14日）